

# 文化 と 芸術



Vol.39  
March, 2024



文化政策研究科長

加藤 裕治

KATO Yuji

## 大学院 文化政策研究科の現在

本学（静岡文化芸術大学）には、修士課程（2年）に特化した文化政策研究科とデザイン研究科からなる大学院が設置されています。大学院の存在は知っていても、どのような研究活動が行われているのか、知らない方も多いのではないのでしょうか。今回は、文化政策研究科（以下、研究科）の概要について、紹介させていただきます。

本研究科のディプロマポリシー（学位認定の基準）には、「未開拓の文化政策諸分野を拓く基礎的研究能力を鍛え、グローバルおよび地域社会の現状を深く理解し、芸術文化の振興を担い、新たな地域政策を創造できる高度専門職業人としての能力を身につけた学生に学位を授与する」と明記されています。大学院を研究者養成の場と考える人も多いかと思いますが、様々な課題に直面する社会において、多方面で活躍できる人材の育成を、本研究科では目指しています。

さて、こうした本研究科の特徴を挙げれば、（あくまで私の視点ですが）「多様性」といえるでしょう。最近、よく聞かれる言葉ですが、この言葉が最もしっくりきます。この多様性というキーワードをもとに、本研究科の特徴を3つ紹介します。

### 1. カリキュラムの多様性

本研究科はその名称から類推できるように、学士課程である文化政策学部での学びや研究活動を、更に深めるカリキュラムが用意されています。



左：修士論文中間発表会 右：大学院生研究室（院生1人ずつに机があります）

院生は、学部の3学科（国際文化学科、文化政策学科、芸術文化学科）と緩やかに接合された、「グローバルスタディーズ」「地域政策マネジメント」「アーツアンドカルチュラルマネジメント

ト」の3領域から1つを選択し、自分自身のテーマに促した学びと研究を行います。一方、院生全員が一堂に介して参加する「テーマ発表会」（M1）や、「修士論文中間発表会」（M2）等の研究発表会も開催しています。教員も含め院生同士が活発に議論できる場を用意し、現代の複雑な課題に対して、領域横断的に研究できる環境を整えています。

### 2. 所属院生の多様性

学士課程との緩やかなつながりについて説明しましたが、実際には、本学以外からの進学者が多い点に本研究科の特徴があります。表1に示したように、この5年間で留学生、社会人、他大学からの入学生が、31名中21名を占めています。多様なキャリアを持った院生同士の交流が盛んな点も、本研究科の魅力のひとつです。

入学年度	外国人留学生	社会人	一般	入学者合計
2019	4	0	1	5(0)
2020	1	2	3	6(0)
2021	1	0	6	7(4)
2022	0	1	3	4(3)
2023	2	2	5	9(3)
合計	8	5	18	31(10)

表1：文化政策研究科入学者数（（ ）内は本学内からの入学者）

### 3. 研究内容の多様性

本研究科では、修士論文を執筆し、審査及び口答試問による試験に合格することが修了要件に含まれています。院生の修士論文は、表2のように、国際的な文化政策に関わる研究から、浜松地域に固有のテーマまで多岐にわたります。こうした研究内容の多様性も、学際的な本研究科の特徴です。

・浜松地域における中小ピアノメーカーの軌跡 —アトラスピアノ製造を事例に—
・呉市例大祭の動態的研究—歴史の変遷と社会的役割の変化—
・パングラデシュのナショナル・アイデンティティ形成
・中国人アートマネジメント人材のキャリア —日本留学経験者に着目して—
・芸術政策を巡る合意形成とローカルアーツエージェンシー —ポートランド市の芸術税とパブリックアートプログラムに着目して—
・静岡県浜松市の在日ブラジル人第2世代のメンタルヘルスをめぐって

表2：最近の修士論文題目一覧（一部）

上記の他にも、地域と密接に関わりながら進められている院生の研究活動など、本研究科のユニークな点を紹介したかったのですが、紙面が足りませんでした。学内に留まらず地域の方々にも、修士論文発表会などに足を運んでいただき、本研究科との接点を持っていただければと願う次第です。

## Contents

### 巻頭

大学院 文化政策研究科の現在  
：加藤裕治  
（文化政策研究科長）

### 研究報告

日本近現代史ゼミにおける  
地域史料の活用  
～「岡村傳一郎日記」を読む  
：水谷 悟（国際文化学科）

「浜名湖アート・クラフトフェア」  
大学ワークショップ参加  
：横地 敬（デザイン学科）

### 活動報告

近世日本の医・薬・食文化と  
その現代的復元  
—歴史学を観光に繋ぐ—  
：宮崎千穂（国際文化学科）

浜名湖花博2024  
（フラワーパーク会場）  
チケットデザイン制作  
：高山靖子（デザイン学科）

公開講座 道具が語る日本の  
文化とものづくりの技術  
～道具の実際から紐解く～  
：新妻淳子（デザイン学科）

### 高校生に語る

人は何を食えることを  
「忘れたのか」という問いの  
重要性  
—食から考える持続可能な社会—  
：武田 淳（国際文化学科）

地域と協働してアートを創る  
—佐久間での取り組み—  
：中川 晃（デザイン学科）  
：小川直茂（デザイン学科）

# 日本近現代史ゼミにおける地域史料の活用 ～「岡村傳一郎日記」を読む

水谷 悟 (国際文化学科)

ゼミを担当する教員として講読する文献・史料を選ぶのは毎年の楽しみでもあり悩みでもある。『岡村傳一郎日記』(以下、「日記」)は、学生たちの問題関心や進路に意味あるテキストを考えるうちに藤枝市郷土博物館で出会った史料である。本稿では、その教育実践と史料解説から得られた知見を報告したい。

岡村傳一郎(1897～1985)は、1897年3月に藤枝市滝沢の旧家の長男に生まれ、瀬戸谷第一尋常小学校、稲葉尋常高等小学校に学んだ。1911年に瀬戸谷郵便局事務員となり、1925年に川根電力索道株式会社に就職し、戦後には瀬戸谷村議会議長、静岡県農業協同組合指導連合会理事などを歴任した人物である。

「日記」は傳一郎が尋常小学校6年次に担任の岩本兼吉先生に提出していた宿題である。表紙に「明治四十三年より」と筆記されているため『藤枝市史叢書8』も1910年5月～1911年3月に書かれたとする。だが、改めて精読すると、初日＝5月12日が「水曜日」で、10月26日に「伊藤博文公は今日午前十一時に、清国にてころさる」と記され、1月1日に「皇紀2570年」とあることから1909年5月～1910年3月の日記と推測される。

近代学校教育の普及に伴い宿題として課された日記は生活文化や地域社会の姿を伝える貴重な史料である。そこで講読史料として「日記」を採用し、藤枝市郷土博物館にゼミでの使用を前提に原本を複写する了解を得、次の手順で読み進めている。

- ① 2人1組となり、日記の担当箇所(3～5行)を解説する
  - ② ペア毎に解説した文字をホワイトボードに書く【写真】
  - ③ ペア毎に書いた文字を音読し、解釈と情報を共有する
  - ④ 教員が文字を確認し、不明な部分を全体で再考する
  - ⑤ 疑問や意見に基づいて議論し、必要に応じて修正する
- ①～⑤を通じて学生たちは地域に残された史料を自らの力で

読み、仲間と知恵や意見を出し合い、解説の大変さと面白さを経験する。また、回ごとに書記1名を決めて専用の原稿用紙に清書し、ゼミの記録を作成する主体となる。そして少年の日記を介して明治後期の地域社会や学校生活を追体験していく。



「日記」講読のなかで学んだことを三点に限り紹介する。

一点目は、当時の尋常小学校6年生が家の貴重な働き手だったことである。傳一郎は毎朝欠かさずに授業の「予習」をしているが、前年に生まれた下の弟の「もり〔※子守〕」をはじめ、醤油や酒の買物、お茶摘み・薪割り・水汲み・庭掃除・肥料運び、上の弟の帳面づくりなど長男として家族のために働いている。早起きして家を手伝う12歳は現代にどれ程いるだろうか。ましてや自分のための1限に間に合わない大学生は本当にこれだけのか?! 時代は異なるものの、投げかけられる問いは決して小さくない。

二点目は、小学校における実際の授業の様子である。【史料1】には「修身をやり、算術をやり、次読方をやり、おべんとうを食べたら大そうおひしかった、四時間目にはいろいろやっ

た」とあり、授業が昼食を前後して1～3限/4限と置かれていたことがわかる。科目名は時間割順に記され、内容のわかる日もある。修身で「ちよくご」を読み、算術で「歩合算」を習い、歴史で「吉宗の事」を教わり、地理で「中国・四国のりょう地方のひかく」をし、理科で「酸という事」を学び、唱歌で「天長節の歌」を歌い、手工で「ねんど細工」に取り組むほか、「図画だが手工をやり」「体操であったが遊戯にした」など生徒の目に映った学校の姿が記されている。学校教育史は概して運営や教員の視点で捉えられてきたが、生徒側の記録を反映させれば、制度と運用、理論と実践を比較・検討することもできる。

三点目は、少年の遊びを復元できることである。【史料1】には、放課後に傳一郎が「竹にてやな〔※仕掛け〕をこしらへ」川で捕った魚を食べ、「ぶらんこをかけて遊んだ」様子が記されている。一年を通じて川遊び(水浴び・石並べ)や虫採り(蛍・蟬)、木登りや将棋などが時に絵を交えて描かれ、「陸軍遊戯」(＝戦争ごっこ)や「ておうきゅう」(＝野球ごっこ)に興じる姿も見出せる。日曜日には「運動会」と称し同級生らと焼津の浜まで遠足を自主的に計画し、日記の文面で岩本先生にも声をかけ、参加してもらっている。

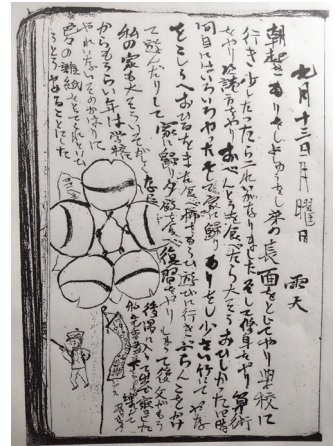
他にも当時の実態や現代のルーツをうかがい知れる記述は多い。傳一郎が博文館の月刊誌『少年世界』を愛読していたこと、遊びに行った先で「八木式粗揉機」を見ていたこと、「ふうとぼおる」(＝サッカー)が普及していたことなど、さらなる調査と分析を加え、本学紀要に論文として発表する予定である。

「日記」に対する学生たちの反応は良好である。115年前の小学6年生の日記から現代の学生が学ぶことは存外が多い。学校教育が時代を超えて共通基盤となり、琴線に触れる内容を含んでいる。著名な政治家や実業家による成功譚、出征軍人による体験談、作家や記者による回想録などとは異なり、親近感をもって時代社会に向き合い、そこから各自が卒業論文で取り組む史料を発見する契機をつかむ。歴史を「勉強」＝「暗記」の対象としてではなく、「研究」＝「解釈」の対象として捉える視座を獲得していくのである。

これからも「日記」に示された地域・学校・家・個人の姿を丹念に調べ、現代との繋がりを考察するなかで学生たちに有用な経験と視座を提供しつつ、史料を読むことの魅力と意義を伝え、共に日本近現代史を学んでいきたい。

※本報告は、水谷研究室での研究成果です。

【史料1】1909年9月13日





研究報告

# 「浜名湖アート・クラフトフェア」 大学ワークショップ参加

横地 敬 (デザイン学科)

## 1. 「浜名湖アート・クラフトフェア」と本学との関わり

「浜名湖アート・クラフトフェアは感性豊かな地域社会の形成と、魅力的で個性あふれる新たな地域の文化の創出を目指し、産官学の連携による浜名湖アート・クラフトフェア実行委員会が企画・運営する文化・情報発信事業であり厳選された全国のクラフト作家による独創的な作品を展示・販売するイベント」<sup>注1</sup>として実行委員長を本学副学長（当時）河原林桂一郎氏が務めるかたちで2007年に第1回が行われ、コロナ禍で中止となった第14回・第15回を除き毎年開催され、2023年で第17回を迎えた。

2日間の会期で約4万人が訪れる浜名湖アート・クラフトフェアの参加は本学にとって地域貢献の場であるだけでなく、浜松と周辺地域に住む子どもとその親を効率的に集客でき、実際にものづくりを楽しんだ思い出として印象的に本学をPRする絶好の機会であった。

スタッフとして参加する本学学生にとっても、多くの作家とその作品に直接触れることのできる機会であり、2019年より本学デザイン学部にて匠領域が設置されたことを踏まえれば、その参加の意義は益々大きくなったといえる。

本学は第1回から第13回までリサイクルアルミを使ったアルミ鋳造ワークショップを出展している。参加者は発泡スチロールで形をつくり、スタッフがそれを砂の中に埋め、溶かした金属を流し込む。すると高温の金属が発泡スチロールを溶かしながら流れ込み、素材が置き換わる。フルモールド法と呼ばれる鋳造技法を用いて出来上がったオーナメントは、参加者が紐などを付けて持ち帰ることができた。



図1 WSポスター (2017年~2019年)

鋳金を専門とする技術員が指揮を執り、実習指導員室（現在の助手研究室）から2名、地域連携室から2名、学生スタッフ約50名が参加する本学でも比較的規模の大きなイベントだった。

## 2. コロナ禍と2023年のワークショップ

新型コロナウイルスへの対応により、本学は第14回から第16回までの3年間で出展を見合わせた。その間に実行委員を務

めた教員とワークショップを指揮した技術員は退職し、さらに予算削減の影響もあり、通常開催となった第17回の出展も危ぶまれる状況となった。これに対応するため、筆者は鋳造ではなく金属パイプを加工してストローをつくるワークショップへ内容を変更し参加することとした。

参加者は材料となる3種類の金属パイプ（真鍮・銅・チタン）から一つを選び、スタッフの補助のもと、切断・曲げ・研磨加工を行い、希望により鍍金などの表面処理を施した。



図2 WSポスター (2023年)

ポイントは以下の3点

- ① 金管楽器製造に使用される素材から地域産業を知る。
- ② 塑性・金属光沢といった金属の多様な性質を学ぶ。
- ③ 使い捨てる機会も多い身近な食器を、永く使用できる素材でつくすることで環境意識を持つ。

鋳造と比較して手軽で安全な内容によって、参加者自らの手で加工できる工程が増え、少人数のスタッフでも対応することができた。

これは学外への広報としては効果的だったといえるが、本学学生へ向けてはクラフトフェアに参加する機会が少なくなってしまう。

今回のワークショップで得た課題と、参加者アンケートの実施など効果測定を行い、2024年以降も継続し、かつ質の高い内容を企画していくことで、本学ともものづくりが盛んなこの地域への貢献に繋げたい。

注1 浜名湖アート・クラフトフェア公式HPより抜粋  
出展

図1 三村友子 (実習指導員※当時) 作成

図2 川原七海 (学生スタッフ) 作成

※本報告は、地域貢献活動による成果です。

# 近世日本の医・薬・食文化とその現代的復元

## — 歴史学を観光に繋ぐ —

宮崎 千穂 (国際文化学科)

静岡文化芸術大学公開講座「近世日本の医・薬・食文化とその現代的復元—歴史学を観光に繋ぐ—」は、2023年7月9日(日)に実施された。本稿では、この講座の企画意図(1.歴史学と観光学、2.医学・薬学史から)と実施内容(3.講座の内容と会場の様子)について記す。

### 1. 歴史学と観光学

本講座は、歴史学に観光学の視点を取り入れて、両者の成果を一般市民・地域に還元する試みとして企画されたものである。近年まで観光学には経済学・経営学的な面が期待されてきたが、古より観光対象として主たる地位を占めてきたのは“由緒あるもの”であった。当世風にいえば、それは“文化資源”と呼ぶことができよう。歴史学と観光学は、元来、親和性の高い学術分野なのである。

近年は特に、国の政策として、地域の文化の振興と経済の活性化が結びつけられるようになってきている。各地域では、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」や「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」といった法律に基づく計画を起点として、自治体や文化施設、観光事業者などが協力して地域の活性化のための挑戦をしている。

こうした文化と観光をめぐる政策的な流れは、歴史学、文化人類学、文学といった人文学系の研究者や博物館の学芸員などの専門家たちの社会的立ち位置を少しずつ変化させているように思われる。彼らは、確実に、地域経済に求められる存在になりつつあるのである。本講座もまた、歴史学研究者である筆者が地域のために何ができるのかという課題への挑戦であった。その方法として、本講座で試みたのは、ものごとの由緒(菓子や茶をめぐる儀礼・行事)を文献等(本草学や故実などに関する古文書)でもって実証するというを通し、文化・芸術の(再)創造の契機をつくることであった。

### 2. 医学・薬学史から

筆者は、医学史を専門としている。現在の主な研究課題は、科研費(基盤B)「近代ユーラシア高緯度帯の風土病とそのパンデミック化—帝国医療研究の拡張を目指して」であり、ユーラシアを俯瞰しながら近代の統治システムと疾病の流行、医療のあり方の解明を目指している。筆者は研究代表者として研究の統括をしつつ、地域的には中央ユーラシアと日本を担当しており、本講座における筆者の研究報告「近世日本における薬としての食物—菓子と茶に注目して」もまたこの課題の下で実施されたものである。従って、本講座の司会・コメントには研究分担者の廣川和花・専修大学教授に担当していただいた。

「帝国医療」とは、医療を統治の仕組みや支配/被支配との関係という観点に重きを置いて論じようとする研究であるとい

える。今や近代医療が批判的に論じられることも珍しくなくなったが、それが現代の医療秩序の基盤であるからこそ、議論すべきことは未だになくなるならない。

筆者報告は、近代医療を相対化するために、前近代の医療について考慮していた過程で生まれたものである。本講座が特に焦点を当てた近世日本において、医薬学・医療を支える知的基盤は中国由来の本草学であった。一方で、祭祀・年中行事や呪いなどの俗信的な行為もまた、統治者や民衆の疾病対応として見逃せないものである。筆者報告は、近世日本の統治機構としての江戸幕府の重要な年中行事であった「嘉定」及び「玄猪」に光をあて、その医療的呪術性や儀礼道具であった菓子をめぐる本草学的な解釈について論じようとするものであった。このように、近世日本の医療世界には学としての本草学と呪いや祈りが交じり合っていたのであるが、それらに西欧医学が加わることにより近代が幕開けることになる。そして、そこでの西欧医学の位置こそ、丁寧な実証により明らかにされるべきである。

### 3. 講座の内容と会場の様子

本講座は、筆者による医学史・薬学史からの研究報告(前述)に、観光学の視点を取り入れた企画を合わせて構成されている。その企画とは、江戸幕府の年中行事「嘉定」の儀礼で用いられていた菓子の“現代的復元”と徳川家康が愛用したとされる丸菓の菓草茶(菓膳茶)としての“再現”である。前者には浜松の老舗和菓子屋巖邑堂より内田弘守氏に、後者には名古屋の伝統ある「和漢・漢方の本草閣」より当主で薬剤師の秋山あかね氏、坪松かおり氏に予めご協力いただき、当日は復元・再現過程等に関する報告や実演をしていただいた。これらの研究・実践報告後には、来場者の方々にも参加していただき、自身の体質に合った菓草茶作りと復元菓子の試食が行われた。参加された方々は、秋山・坪松両氏の指導の下、真剣な面持ちで菓草を選んだり、菓草茶が完成して明るい笑顔を見せたりしていた。

本講座は、歴史学に観光学を掛け合わせた研究のアウトリーチの試みであったが、来場者の方々から好評をいただいたことで、ある程度の手応えを得ることができた。今後も一層研究に邁進するとともに、そのより良いアウトリーチ方法を模索したい。



研究・実践報告の様子



菓草茶作り前の講義の様子

※本研究は、科研費・基盤研究B(宮崎千穂:21H00500)の成果の一部です。



## 活動報告

浜名湖花博2024（フラワーパーク会場）  
チケットデザイン制作

高山 靖子（デザイン学科）

2023年春、受託事業として、2024年3月23日（土）から6月16日（日）に開催される浜名湖花博2024（フラワーパーク会場）のチケットデザイン制作と写真映えスポットアイデア提案の依頼を受けた。本学の受託事業を受ける基準として、「教育に資する」という条件がある。「電子チケットとは異なる、手に取った時に感じるワクワクする紙のチケットの良さを大切にしたい」という依頼は、プロダクトデザインを学ぶ学生達に是非とも考えてもらいたいテーマであると思い、即答で引き受けた。

学生達は、公益財団法人浜松市花みどり振興財団より委託業務の趣旨とともに、はままつフラワーパークの魅力について説明を受けた後、まずはともあれ、可能な限り会場となるフラワーパークへ足を運び、季節とともに移ろう花々とその景色の調査を行うことにした。彼らは、できるだけたくさんの写真を撮ること以外には特別な指示は受けず、来場者として思い切り楽しんだ。用意周到な者は、HPやSNSで事前に季節の花の見どころを調べ、現地の地図と見比べて効率よく回る。直感派は、見どころを押さえながらも、途中から脇道へ消えて行く。花の写真を撮り、お互いの写真を撮り、花の香りのアイスクリームを食べ、帰路では各々がみつけた見どころや目に留まった来場者について情報交換を行った。学生達の撮った写真には言葉で表現されていなかった感動が写り、交わされた言葉では写真には写っていない感動が共有された。雨の雫を夕日に光らせるチューリップ、髪にも残るようなバラの香り、風に揺れる藤、フラワートレインの車窓を流れ去る紫陽花。どれにも花だけではなく五感を通じて感じた情景が含まれていた。来場者についても非常に深く観察と考察を行い、目に留まった来場者の細かいキャラクター設定までして、発想を広げた。

上記の調査と考察をもとに、現来場者の把握、新規来場者開拓の可能性、来場者の行動プロセス、デザイン対象（チケット、写真映えスポット）の持つ価値とそれにより高められるその他の価値等についてディスカッションを行った。このプロジェクトでは、チケットと写真映えスポットのディスカッションを分けて、同時に行うことを試みた。既存の紙のチケットの表現手法に捕らわれずに、経験してほしい価値そのものを先に考えてもらうことを優先したからだ。チケットデザインの市場調査はある程度表現したい価値が固まってから行った。

こうしたプロセスを経て、以下5案のチケットが提案された。なお、チケットのデザインには、浜名湖花博2024のロゴマークとはままつフラワーパークマスコットキャラクターふらまる（以下、ふらまる）を入れることが課されている。

- ① フラマウンドで踊る可愛いフラガールと四季の花々が刺繍で表現された案

- ② フラワーパークの花々やフラワートレインを花束にしたダイナミックなコラージュ案  
③ 花々をあしらった市松模様から、ふらまるが覗く華やかな千代紙案  
④ 花道を駆け巡るフラワートレインの思い出をチケットに込めるエアメール案  
⑤ ふらまるの顔の下半分が花々で描かれ、口元にあてると「ふらまるになれる」、思わず写真を撮りたくなる案



⑤案プレゼンテーション用写真（採用案）

最終的には、⑤「ふらまるになれる」案が採用された。このチケットは、入場後に来場者がチケットを使って写真を撮るという行為を誘発し、入場者がこの写真をSNSに投稿することによって、プロモーション効果が期待できる。チケットによって自分の顔を半分隠せるという点と可愛いふらまるになれるという点も投稿する行為に対して効果的に働くと考えられる。また、花博と同時にふらまるの人気上昇にも一役買うことが期待される。

紙のチケットを手で持ってトリック写真を撮る、どの位置にあてるかを撮影者とワイワイ言いながら。「電子チケットとは異なる、手に取った時に感じるワクワクする紙のチケットの良さを大切にしたい」との依頼に、十分に答えられる作品に仕上がった。

最後に、たくさんの案を提案してくれた学生達と、グラフィックデザインの最終仕上げ段階においてアドバイスをくださった佐井国夫特任教授に心より感謝申し上げます。

※本報告は、受託事業『浜名湖花博2024』フラワーパーク会場関連業務委託を受けた活動による成果の一部です。

# 公開講座 道具が語る日本の文化とものづくりの技術 ～道具の実際から紐解く

新妻 淳子 (デザイン学科)

## 1. はじめに

日本の文化の中で継承されてきた「ものづくり文化」と大地の恵み「素材」について、文化の継承と新たな創造へ繋げる匠公開講座を2018年度より開催している。

2023年度は、「道具」について理解し、「道具」を使うという体験から、日本の文化とものづくりの技術について紐解くことを目的とした。第一部の講演では、50年前までは身近であった「山里の道具と生活文化」について民俗学の視点から講演をいただいた。続いて、木を加工する「道具」と「技術」、木という「素材」について考えた。総括として、「道具」を幅広く捉え、「日本の文化とものづくりの技術」についてディスカッションを行った。第二部は、大工による大工道具の実演の後、実際に道具を使い、ものづくりの文化を考える機会とした。

本講座には、日本の文化とものづくりの技術を未来へ継承し、新たな創造へ繋げるヒントがたくさんあり、そのいくつかを紹介することで報告としたい。

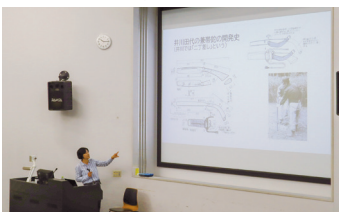
## 2. 講演「道具が語る日本の文化とものづくりの技術」

### (1) 講演「山里の道具と生活文化」

外立ますみ (常葉大学非常勤講師・民具学)

一軒の家にとだけだけの「もの」があるのだろうか？ ある農家を調べた結果、約10,000点もの「もの」があり、世代を超えて伝えられた「もの」以外に現代の大量生産品も含まれていた。必要とされる「もの」はたとえ素材が変わっても機能を継承しながら存在し続けるものである。

山仕事の道具には、農家で使われる鎌や鉋など、専門家が使うヨキ・マサカリ・大鋸などがある。前者は、地元の鍛冶屋が使用者と対話しながら完成させるため地域差があり、後者は土佐など有力な鍛冶産地のものが近代になって広く流通した。前者の例として、静岡県西部においては、金原明善が改良を重ねた下刈鎌「明善鎌」が知られ、県中部静岡市の井川では、鉋と鋸を1つの鞘に兼帯する開発があった。仕事の効率をあげる道具そのものの工夫、そして道具を便利にするための工夫がある。



講演：山里の道具と生活文化

### (2) 鼎談「大工道具と木の文化」

水野日出男 (大工)

新妻淳子・山口貴一 (木工) (静岡文化芸術大学)

木を扱う仕事において、今日では電動工具の使用が普通であるという。鉄は弥生時代に大陸から日本列島に伝来し、鉄の道具が誕生した。大工道具の役割を動作で考えてみると、割る、打つ、研る、削る、切ることに適した道具の形状を求めて工夫されている。その道具を手にも、木の性質、木の癖、木の感触などを活かす技術とは？ 軟らかい木、硬い木、年輪の美しさ、木そのものの素材感を理解して適材適所に用いることと言い、身近な木と対話しながら生活してきたことで、日本では木の文化が発展してきたといえる。木の文化を未来へ伝えるために

は？ 先人たちが作り伝えてきた道具への信頼が、技術の継承につながり、私たちも道具を工夫し未来へ伝えていくことが必要だ。

### (3) ディスカッション「日本の文化とものづくりの技術」

外立ますみ、水野日出男

荒川朋子・新妻淳子・山口貴一 (静岡文化芸術大学)

道具を作り、人と道具の対話が「技」となり「もの」ができる。世界規模で考えると日本人と道具の関係性は、万物に神が宿るという精神性、手を合わせるという自然崇拝的なものに影響を受けているといえる。美しい道具から美しいものが生まれる。美しい造形のためには美しい内側があると荒川氏はいう。道具とは？ 大工水野氏は木と道具の関係性を大事にする姿勢を語り、木工山口氏は道具に愛着を持って作品制作に挑んでいるという。外立氏は道具を記録する際に痕跡から使い手の姿や息づかいまでもが見えると話した。道具を握る私たちの手は、素材を感じ、道具も作る。手も道具であるということにも立ち返った。

### 3. ワークショップ「道具とものづくりの技術」

#### 大工道具の実演と体験

水野日出男、山口貴一

月原光泰・萩本茂博・高橋敦仁 (大工)

大工道具の役割を意識した上で、大工による実演が行われた。鑿という道具一つを取っても大工は穴を彫るのに使い、彫刻家は木を鑿で研りながら形を創り上げていく。現在ほとんど使われていない鉋は、木の表面を研って仕上げしていく道具だ。鉋は木を削る道具であるが、中世までは槍状の「槍鉋」しかなかった。大工は仕事に応じて道具を作り、鑿の数は100本を超える。その大工の手ほどきによって参加者は道具に触れ、道具の重みや道具を操る技、使い手の心までを実感する機会となった。



実演：鑿…彫る



体験：鉋…研る

### 4. おわりに

日常の道具「民具」から大工道具まで、自然の素材と向き合い「もの」を作る道具であり、そこには人が見えてきた。このような「ものづくりの文化」を支えてきた伝統的な道具と人を未来へ繋ぐことは重要であり、公開講座等で伝えていきたい。

※本報告は、2023年10月1日(日)に開催した静岡文化芸術大学公開講座による成果です。



高校生に語る

# 人は何を食べることを「忘れたのか」という問いの重要性

## — 食から考える持続可能な社会 —

武田 淳 (国際文化学科)

小麦をはじめとした食品の価格が高騰し、家計が圧迫されている。生活は苦しいが、日本では「値上げで済んでいる」ともいえるかもしれない。一方ガーナやエチオピアなどの一部の地域では、物価高騰のあおりを受けて飢餓が起きているからである。なお、いずれの国も主産業は農業である。「食糧を作っている人々が飢える」という奇妙な世界を我々は生きている。なぜ、このような事態が起きるのか、問題解決のカギはどこにあるのか、食をめぐるこれからの社会を考えてみたい。

かつて、飢餓の主要因は、干ばつや冷害などの気象条件とされてきたが、現在起きている飢餓は、途上国の急激な経済成長が背景にあるとWFP (国連世界食糧計画) は指摘する。ここではガーナの事例に挙げたい。ガーナと言えばカカオ生産が有名であるが、同時に「農園で働いている人々はとても貧しい」というイメージを抱いている人も少なくないだろう。しかし、近年は、GoogleやX (旧Twitter) がアフリカ初の拠点をガーナに開設し、「西アフリカのシリコンバレー」と評されるほど経済成長が著しい。それに伴って、都市の開発が進み、かつては「一生カカオ農園で働かざるを得ない」と考えられていた人々が、都市に働き先を求めて移住しているのである。しかし、職業訓練を受けていない人々は、低賃金労働に従事せざるを得ない。農村にいるときは食糧自給が可能でも、都市ではそうはいかない。そのため、わずかな収入の大半は食糧購入に充てられることになる。このような状況に小麦などの価格高騰が重なったことで「高いので食糧が買えない」という事態が発生したのである。

では、このような状況をどのように打開したらいいのか。筆者が研究するパプアニューギニアからそのヒントを探ってみよう。調査地は、標高2,000mの山岳地帯で暮らすヤガリア (Yagaria) と呼ばれる民族の村である。いまだに電気・ガス・水道・携帯電話の電波もないこの村の生活は、農耕を基本にしながらも狩猟と採集を組み合わせながら成り立っている。彼らと森を歩くと、目的地へ着くまでに何度も足を止める。キノボリカンガルーの巣を見つけて急に狩りを始めたり、野草を摘んだり、移動の最中にも食糧調達をしている。食糧の「足し」になるものを、少量ずつ自然界から得ることで日々の生活を成り立たせているのである。

こうした「食糧の足し」のひとつに昆虫がある。ヤガリアの人々は幼虫だけでなく、成虫も食べる。そのバリエーションは、カミキリムシ、バッタ、カメムシなど多岐に渡る。彼らから、それまで「ただの草や虫」だと思っていたものが有用なものだと学んだとき、私たちの身の回



りには実に多様な「食べもの」で溢れていることに気付かされる。

もちろん、「食べられるもの」と「食べられないもの」を峻別する力は、私たちの文化の中にも存在してきた。例えば、筆者は昨年、市民を対象にどんぐりを食べるワークショップを開催した。どんぐりは縄文時代から食べられてきた木の実であり、中には軽く煎っただけで簡単に食べる種類も存在する (そもそも栗はどんぐりの一種でもある)。参加者のうち、中高生にとって、どんぐりは「はじめて食べる食材」であったが、年配の方にとっては「幼少期のなつかしい経験」であった。つまり、わずか数十年しか歳の差がないにも関わらず、私たちは「何が食べることができるか」に関する記憶を忘却しているのである。

なお、主食として利用可能な植物は、世界に約30,000種存在すると言われている。一方で、世界で消費されている主食の4分の3は、トウモロコシ、小麦、米で占められている。多様に存在する「食べもの」のうち、私たちはごく限られたものしか口にしていないのである。換言すれば、私たちの世界は、「食べ方を忘れたもの」で溢れているのである。つまり、現在起きている飢餓は、「本来は食べられるもの」に囲まれながら起きている。それゆえに、「忘れられた食べもの」の記憶を記録に残しておく作業は、今後の社会で重要になると筆者は考えている。

2050年には世界人口は97億人に達する。その時、すべての人が現在のアメリカ合衆国の人と同じ食生活をしたと仮定すると、ブラジルの国土面積に相当する森林を伐採して農地に変えなければ人類を養うことはできないと言われている。そこで、畜産肉の消費量の減少や、肉に替わる代替食品 (昆虫食や培養肉など) の開発が進められている。持続可能な食糧調達を考える上では、環境負荷が低い食へのシフトが欠かせない。しかし、培養肉も昆虫食も「売りもの」になってしまった瞬間、「お金がないから買えない」ことに起因する現代の飢餓は回避できない。そう考えると別の解決策があるのかもしれない。そのひとつは、ここまで見てきたような「忘れられた食べもの」を利用することである。帰り道に、食糧の「足し」になるものを少量ずつ取って食べる。そうした先人たちの営みが持続可能な社会のヒントになると考えている。

大学ではフェアトレードなどの国際協力の科目を担当しています。これまで学生たちと行った実践は、こちらからご覧いただけます。



※本研究は、JSPS 科研費20H04438および20K20506の助成を受けて実施した研究成果の一部です。

## 高校生に語る

地域と協働してアートを創る  
— 佐久間での取り組み —中川 晃 (デザイン学科)  
小川 直茂 (デザイン学科)

## 1. 佐久間アートプロジェクトについて

2023年8月、JR飯田線浦川駅の駅舎内に2枚の大きなアートウォールが設置された。静岡文化芸術大学の〈地域連携演習〉というプログラムの一環で実施された〈佐久間アートプロジェクト〉によるものである。

〈佐久間アートプロジェクト〉の実施母体は浜松近隣の民間企業の経営者、浜松市職員、静岡文化芸術大学教員で構成される〈シン・サクマ計画〉という任意団体であり、当該団体は佐久間町の活性化を目的として設立された。そして、〈佐久間アートプロジェクト〉は〈シン・サクマ計画〉のスタッフ、佐久間町の小・中学生8名と静岡文化芸術大学の大学生11名にて2023年4月から7月にかけて実施された。



浦川駅に設置されたアートウォールと参加小・中学生・大学生

## 2. 浜松市天竜区佐久間町

当該プロジェクトの活動地域である佐久間町は浜松市の中心部から北に約40kmの場所に位置し、かつては林業を主な産業として繁栄していた。浜松市の調査によると、佐久間町は直近15年間で人口は約45%減少し、平均年齢は10歳程度高齢化している高齢化と過疎化が著しく進行しており地域課題となっている。



佐久間町浦川の景観

## 3. プログラムとしての目的

〈地域連携演習〉のプログラム〈佐久間アートプロジェクト〉における目的は複数存在する。1点目はアートウォール制

作を通じた技術やノウハウのスキル醸成である。2点目は佐久間町の小・中学生との協働制作を通じた地域との連携である。これは交流する事に加え、大学生が年長者として指導やサポートを通じた〈人に教える・伝える力〉の習得を目指している。そして3点目は佐久間町住民へのインタビューを通じたリサーチスキルの醸成である。参加学生達はモチーフ探しとして行う佐久間町の歴史や風物のリサーチを通じて中山間地域に対する理解を深める事を目的としている。以上のように、〈地域連携演習〉のプログラム〈佐久間アートプロジェクト〉にはアートウォール制作の背景に多面的な学びを得る目的を有する。

## 4. 地域連携演習のプログラムとしての進め方

〈佐久間アートプロジェクト〉は全6回実施された。第1回と第2回は佐久間町にて実施し、佐久間町の小・中学生と大学生との交流や佐久間町住民へのインタビュー、モチーフの抽出が行われた。第3回以降は静岡文化芸術大学内にて実施された。静岡文化芸術大学と佐久間町は自動車にて片道1時間以上を要するため、〈シン・サクマ計画〉のスタッフが浜松近隣企業より協賛金を集めてバスをチャーターして送迎を行なった。



アートウォール作画の様子

## 5. 佐久間アートプロジェクトがもたらした多様な効果

〈佐久間アートプロジェクト〉は多様な効果をもたらした。まずはJR飯田線浦川駅舎の装飾環境の改善が為された。次に佐久間町の小・中学生と静岡文化芸術大学の大学生はアートウォール制作を通じて制作スキルの醸成だけでなく、交流や中山間地域への理解を深める事が出来た。そして、アートウォールに描かれる風物を元に佐久間町住民が地域を振り返る話題のきっかけが生まれる効果も確認された。更には、協賛金等で間接的に関わった方々が佐久間町を往訪、もしくは往訪意欲を向上させる現象が多数確認された。

当該プロジェクトが学生の学びとしてだけでなく、結果として地域貢献に繋がった事は担当教員として嬉しく感じた。

※本報告は、地域連携演習でのプログラムによる成果です。